市史講座第 8 回ミニレポート

11 月 16 日（土）第 8 回の講座が開かれました。

第 1 部 ：「戦国時代の松江地域」（講師：島根大学教育学部教授　長谷川博史　先生）

長谷川先生は、16 世紀後半の松江地域について、尼子氏から毛利氏への権力の交代を迎えていたこと、松江地域での毛利氏のイメージが薄いのは外来の勢力であり、出雲国内に本拠を持たなかったことが要因であることを指摘されています。その上で、松江市域で行われた戦争とその舞台となった地域から、宍道湖・中海・島根半島周辺の海・湖の制圧が、戦局の帰趨を分ける要因であることを重視されました。

毛利氏による出雲国支配について、その勢力の拡大状況を説明し、安芸の国人領主から急激に勢力を広げた結果、勢力の拡大に対応しきれていないことを指摘されました。新たに毛利氏に属した出雲国内の国人領主に対し、松江市内の長田東郷について、多賀氏・三刀屋氏・宇山氏に重複して所領を与えたため、所領の争いに苦慮した事など、いくつかの事例を紹介されました。

また戦国時代の松江地域について、国人領主の所領争論が頻発したこと、朝酌郷周辺の事例では「国次不作」という表現で国内が不作であったことと、新山城に近い朝酌郷が疲弊していた状況を述べられました。

この他、戦乱と同時に寺社造営も頻繁に行われていたこと、天正 11 年の神魂神社造営では毛利氏や国内の国人領主の他に、木材を島根郡内から刈りだして村ごとに運び、大工など多くの職人が意宇郡内の村々から参加したなど、現在の市内の各所から物資と労働力を出して復興した神社が、現在も当時の姿を留めていることを指摘されています。

16 世紀の松江地域については、『松江市史』の通史編でも詳しく語られることになるでしょう。

第 2 部 ：「絵図に見る白潟三町屋の実態と動向」（講師: 前島根地理学会会長　大矢幸雄 先生）

大矢先生は、今年度末、平成 26 年 3 月に発行する『松江市史』史料編「絵図・地図」編の部会長を務められ、多くの絵図・地図を発見・調査されてきました。

その中から『松江城下白潟町家絵図』（全 8 枚、松江市所蔵）を分析し、これまで不明だった町並の変遷、屋敷構成、町の成長過程などを、『大保恵日記』（和多見町新屋手代太助の日記）や、『瀧川家公用控』（末次の新屋本家代々の当主伝右衛門の役用記録）などの記録を使ってお話になりました。

『松江城下白潟町家絵図』は、一軒ごとに間口・奥行・所有者・屋号・借家人・土蔵・湯殿・竈・井戸・便所などが詳細に記されています。調査の結果、この絵図は安永年間から天保年間（1772～1843 年）にかけて作成されたことが分かりました。約 60 年余りの時間差が1枚の絵図に潜んでいました。この図は町人の賦課を決めるための図面で、住民台帳であり、課税台帳でもあったわけです。

城下町は、城に対する町人地の形態が縦向きか、横向きかのどちらかであるそうです。松江は末次が横向き、白潟が縦向きという二面性をもった城下町です。末次は松江城築城後に藩主と共に来た御用商人や職人、農村部の地侍的土豪層を商人として構成し、それに対して白潟は築城以前から住む「白潟衆」と呼ばれる人々で構成された地域と説明されました。

また『松江城下白潟町家絵図』には1枚の絵図の上に 4 枚にわたる重ね貼りがされていますが、貼紙の年代を調査し、絵図作成時から 60 年余にわたる家屋敷の変化が判明したとのことです。8 枚のうち魚町・和多見町・本町の 3 枚を集中的に調査し、借家率の変化を分析されました。借家率は 90 パーセントを占め、1割が大家である豪商・地主で、その人々が長屋を多く所有しているということです。全国的にも高い借家人の多さです。

その借家にも表借家と裏借家があり、表借家人は借家で店を開く家持人の分家や別家人の住居、松江市街の豪農層の借家、借家経営者住まい、別にある本家の販売・輸送など肩代わりするための借家であり、裏長屋は職人層、日雇い、振売り、賃仕事などで暮らす民衆社会ではなかったかと話されました。

その他、この絵図や記録などから、これまで分からなかった松江町人の実態が、研究次第で解明されることでしょう。